

認知症家族の会の「集い」に協力して

[発表者] 高杉春代 (保健師)

[共同研究者] 大場敏明

・はじめに

厚生労働省の推計によると認知症日常生活自立度Ⅱ以上の高齢者は図表のとおりである。

認知症患者の今後の推移

	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年
認知症高齢者	208万人	250万人	289万人	323万人	353万人
自立度Ⅱ以上 (65歳以上の人口比)	(7.2%)	(7.6%)	(8.4%)	(9.3%)	(10.2%)
自立度Ⅲ以上 (65歳以上の人口比)	(3.9%)	(4.1%)	(4.5%)	(5.1%)	(5.5%)

認知症日常生活自立度Ⅱ以上の高齢者は2015年に250万人・7.6%、2020年に289万人・8.4%、2025年に323万人・9.3%、2030年には353万人10.2%と予測されている。2030年には高齢者の10人に1人が認知症に罹ることになる。この数字は保険医が日常の診療活動の中で認知症患者に対応せざる得なくなる数字ともいえる。認知症は、他疾患と違い、診断後にその人らしい人生が送れるためには、医療と介護の両方からの密接に連携した支援が必要とされている。本研究では、認知症医療とケアに複合的に取り組んできた保険医の立場から「認知症の人と家族の会」の支援実績を踏まえ、介護家族支援の必要性と保険医の地域医療の役割について考察したので報告する。

・対象と支援期間 対象は「認知症の人と家族の会」埼玉県支部・越谷地区（三郷地区）集いの参加家族と参加関係者。期間は2006年から2011年までの5年間である。

・集いの運営方法 小さな集いの運営方法は10～20人位の小さな集まりを目指し、介護中の家族が十分に話し合うことができる、介護者同士の話し合う場を中心として運営に臨んでいる。1回の開催時間は2時間位で参加者の負担を考慮しており、この中ではプライバシーの保護に注意している。また、深刻な相談は、別にその機会と機関を紹介している。

・結果

1・集いへの介護家族と関係者の参加状況

集いへの参加状況は年々増加傾向にあり、特に最初のころは関係者の参加比率が高かったが、回数を重ねると介護者が増加してきている。

「集い」への介護家族と関係者の参加状況

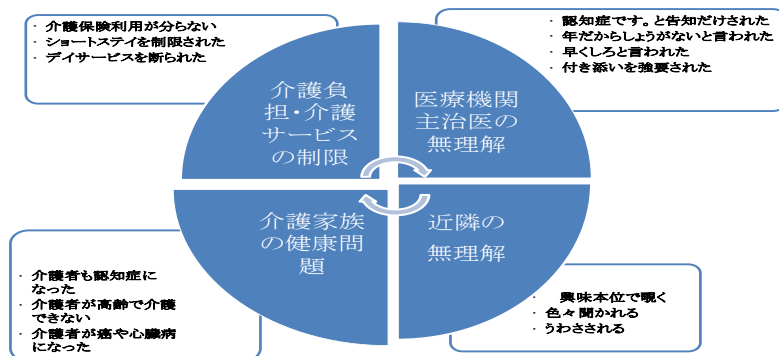
開催年度	開催回数	総参加数	内 介護家族数	1回当たりの平均数	参加介護家族の割合
2006年度	1回	26人	—		
2007年度	4回	74人	24人	18.5人	32.4%
2008年度	3回	45人	16人	15.0人	35.5%
2009年度	3回	95人	45人	31.0人	47.4%
2010年度	3回	50人	30人	16.7人	60.0%
2011年度	1回(予定4)	25人	13人	25.0人	52.0%
合計	15回	315人	128人		

2・認知症介護家族の現状

この集いでは介護家族の困難な現状もリアルに話され以下の内容が浮き彫りにされた。

認知症介護家族の現状

「集い」の参加の中から～



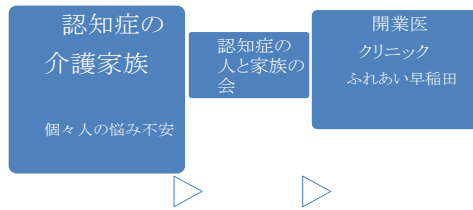
この中では介護負担の大きさと介護サービスの制限の話が多かった。介護保険の利用方法が分らないという人もいるが、介護認定の範囲では介護サービスが不足している人、介護サービスが利用できるように認定がおりても認知症の周辺症状のために、ショートステイの利用を制限される人もいる。また診断した医師や医療機関の対応も問題になっていた。診断名は言われたが傷ついた。対応を話してくれなかった。入院時付き添いを言われたなどがある。介護者自身も健康上の問題を抱えて介護どころではなくなっていることや近所の噂や覗きなどもあり辛い経験をしているなど近所の無理解等も出されている。

3・集いに参加した介護家族の変化

参加した家族は、同じような不安とつらさを出し合うことで共感し心が安らぎ、介護経験を伝え合うことで学び合い、参加した関係機関や専門職とも知り合いになり相談できる環境が作られた。また、かかりつけ医が参加することで専門的知識を得て、少し今後を予測できることにも役立っていると思われる。

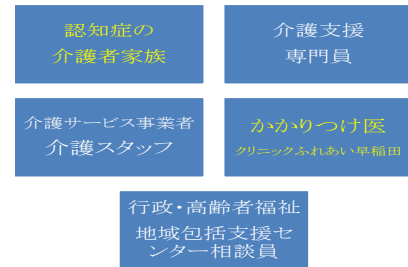
4・集い開設当初と5年後の参加状況

「集い」開設当初の参加状況



5年後「集い」参加者の所属と職業

ネットワークの広がりの変化



開設当初は、認知症の介護家族とかかりつけ医の間を認知症の人と家族の会の世話人が結び付け開催された。しかし、5年が経過すると介護家族はもちろん、介護支援専門員が家族に付添って参加したり、介護サービススタッフが参加したり、高齢者福祉行政関係者、地域包括支援センター相談員が参加するようになって、ネットワークが広がってきた。

5・「集い」開催への支援内容

「集い」開催へのかかりつけ医支援内容

運営への支援

- ・ 初動時期の会場提供
- ・ 開催方法の助言
- ・ 広報活動の支援

専門的支援

- ・ 認知症の理解のためのミニ講座
- ・ 認知症の最新治療
- ・ 認知症ケアへの助言

・ 考察

・ 認知症介護家族と関係者の「集い」の有効性について

以上のことから介護者にとっては、介護破綻を予防し、継続して介護していこうという意欲を維持し、介護力も高めさせ、介護者自身の生活の質も変化させるものと思われる。一方、参加した関係者にとっては、認知症への取り組みの必要性が認識され、介護者の困難な現状を理解し、そのことで相談やサービス提供に配慮がされ、相談やサービスの質の向上につながるのではないと思われる。

また何よりも関係者同士が知り合い、支援ネットワークが広がっていく成果は大きい。

・ かかりつけ医と認知症の人を取り巻く関係者の協働

かかりつけ医が「集い」に参加することで認知症の人と家族を取り巻く支援関係者との協働基盤が作られる。これは、認知症の人が安心して住み慣れた地域で暮らし続けられる地域基盤づくりでもある。医師という立場で、小さな集いから関係する人々と協働していくことは、地域から見ると、より専門的かつ安心できる広がりを推進させていく事につながる。そしてその広がりが医療と生活・医療と介護という包括的な支援ネットワークにつながり、その推進役としてかかりつけ医が期待されているといえよう。